

千代田区

川沿いのまちづくりガイドライン骨子（案）

令和4年 11月

千代田区

目次

第1章 はじめに

1 ガイドライン策定の目的	3
2 ガイドラインの位置づけ	4
3 千代田区の川の歴史	5
4 ガイドラインの対象エリア	10
5 エリア別の概況.....	10

第2章 千代田区の川沿いの現状

1 対象エリアの人口・世帯数推移	11
2 対象エリアの昼間人口と昼夜間人口比率	12
3 区民の川に対する意識	15
4 土地利用	16
5 地域資源.....	20
6 各エリアの景観特性	24
7 眺望点とランドマーク	26
8 水辺に近づける場所	29
9 川沿いの現状を踏まえた課題	32
10 川沿いの空間が持つ機能・ポテンシャル.....	35

第3章 川沿いまちづくり実現のためのビジョン・方針

1 全体ビジョン	37
2 川沿いのまちづくりの方針.....	38
(方針1) 川に人々の意識を向ける -川の魅力の再発信-	38
(方針2) 川に開いたまちづくり -水をいかした空間の創出-	39
(方針3) 水辺空間の連続性 -水辺の拠点同士を結ぶネットワークの構築-	40
(方針4) 川を使う -ハレの場としての川空間の活用-	41
3 方針別の取組み	42

1 ガイドライン策定の目的

千代田区の川空間は、江戸時代より物資の輸送や川沿いの土地における河岸地としての利用など、人々の生活に欠かせないものでした。

その後、長い歴史の中で川空間は、川上に首都高速道路が走り、護岸にはカミソリ堤防と呼ばれる高い堤防が築かれ、建築物は背を向けた環境となってきました。

近年、川空間については水辺の持つ自然環境や親水空間としての機能が見直され始め、まちづくりでは水辺を活用したいという機運が高まってきています。また、首都高地下化や東京都による外濠浄化に向けた基本計画の策定など、千代田区内の川を取り巻く状況は変革の時期にあります。

千代田区のまちづくりについても、令和3年に千代田区都市計画マスタープラン（以下、区都市マスタープラン）を改訂し、つながる都心を将来像とし、都心生活の質「QOL：Quality Of Life」を豊かにしていく計画としました。「人」が主役のまちづくり、「豊かな都心生活の継承・創造」、「加速する社会の変革を支えるまちづくり」の視点を持ち、これからのまちづくりの展開、都心千代田ならではの魅力の進化のテーマの一つとして「緑と水辺がつなぐ良質な空間をつくり、活かすまちづくり」を掲げています。

さらに、千代田区ならではのウォークラブルなまちづくりを推進するため、令和4年に「千代田区ウォークラブルまちづくりデザイン」（以下、区ウォークラブルデザイン）を策定し、川空間はパブリック空間の要素として重要な位置づけがされています。

また、千代田区の古くから都市を形作る骨格である川を活かすために平成27年には人々が身近に感じられる空間として水辺の再生を目指し「**水辺を魅力ある都市空間に再生する条例**」が制定されました。

以上をふまえ、都心の貴重な空間資源である千代田区内の川の空間を観光・文化・産業・歴史・防災など様々な視点から見つめなおし、水辺を心地よく過ごせる空間、人が歩く目線で楽しめる空間として質と機能向上を目指すため、川沿いのまちづくりガイドラインの策定を行います。

本ガイドラインは、住む人々、訪れる人々にとって新たな魅力ある都市空間として活用していくために、区の考えを示していくものです。

2 ガイドラインの位置づけ

当ガイドラインは、区のまちづくり分野の最上位計画である区都市マスタープランと区ウォークアブルデザインにつながるガイドラインとなります。

都市生活の質や地域の魅力の向上を目指した川沿いのまちづくりについて区の考え、方針を定め地域ごとの目指すべき姿を示すこととなります。

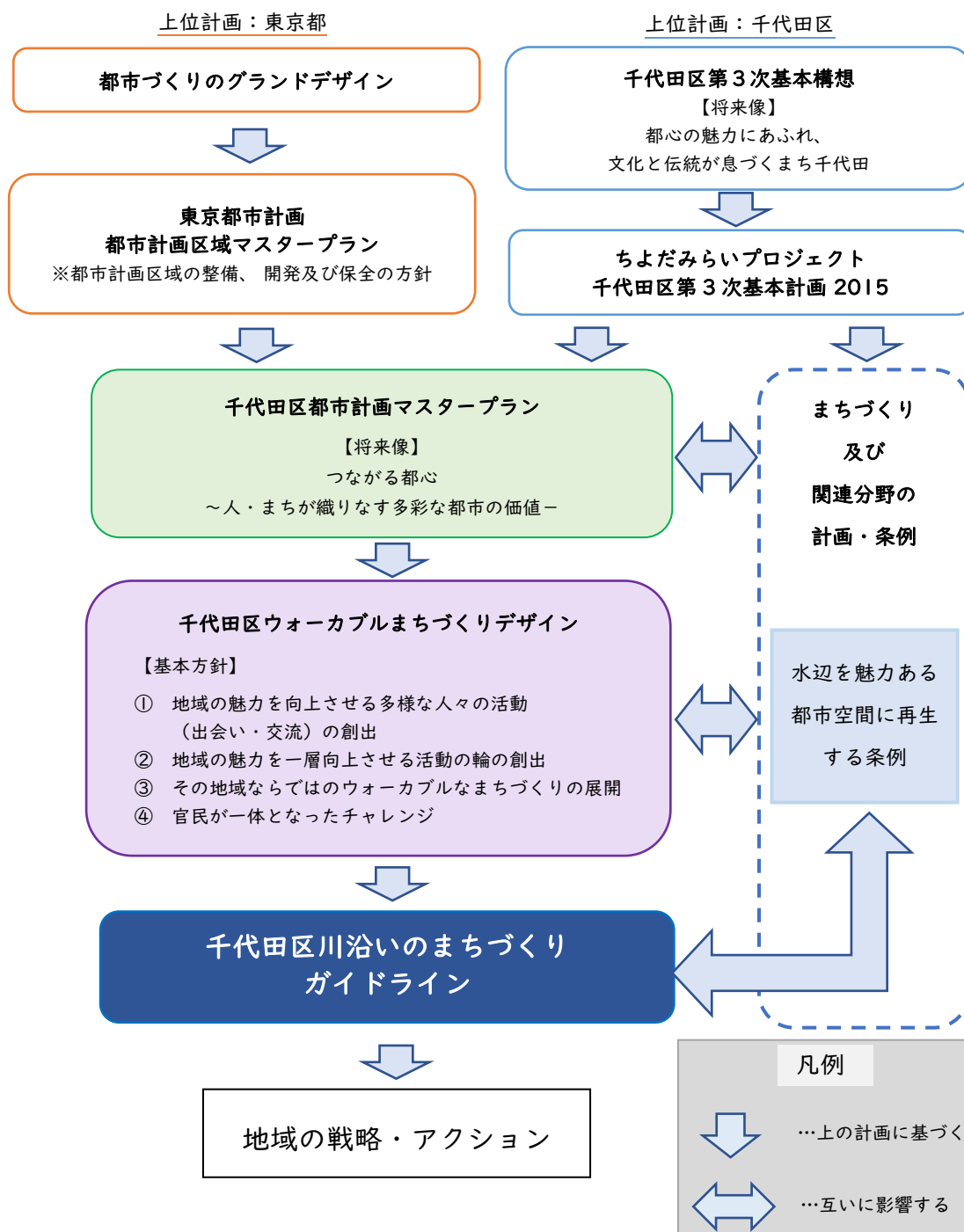


図 川沿いのまちづくりガイドラインの位置づけ

3.千代田区の川の歴史

江戸時代まで（～1860年） - 区内川の形成 -

千代田区内の川は、江戸時代以前には総称して平川と呼ばれ現在と異なる流路で流れていました。

1603年に徳川家康が天下を取り、その後跡を継いだ徳川秀忠によって、大名たちが江戸に邸宅を構えるにあたり、1610年頃から現在の神田三崎町、神保町、一ツ橋一帯を宅地化するために小石川（現在の白山通り付近を流れていた）、



図 江戸城外郭の形成

旧石神井川（不忍池から秋葉原周辺に流れていた）の水を隅田川に流すために神田山（現在の駿河台）の台地が元和6年（1620年）に開削されました。一方で、流路が変更されたことにより江戸城周辺に洪水が発生する危険性が増したため、平川の一部（現在の三崎橋～南堀留橋付近）が埋め立てられました。この工事により、現在の神田川と日本橋川の原型ができました。

その後万治3年（1660年）に現在の神田川は舟運ができるように拡幅工事が行われ、工事の為の材木を置くための河岸が、日本橋川にあった鎌倉河岸から移転してくるのを皮切りに両岸に河岸地が作られ、廻船を用いて江戸に運ばれてきた米や酒などを河岸地を利用する商人たちが扱うようになりました。

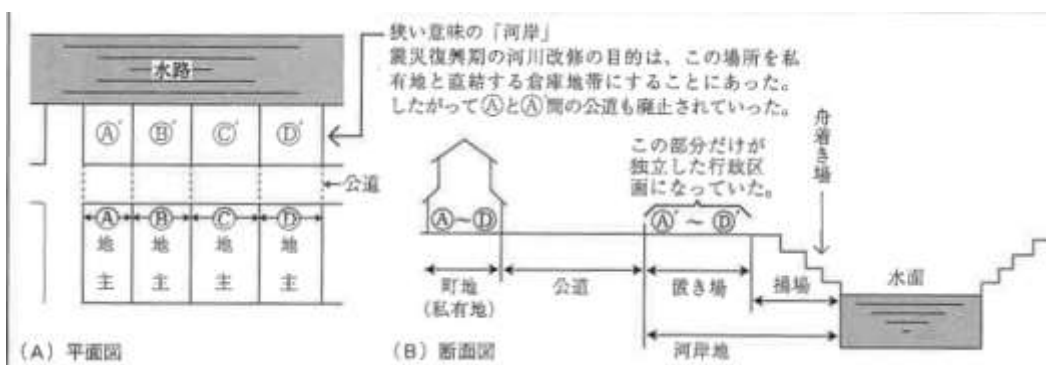


図 河岸地の土地利用構造

河岸地では、船が着岸し、川沿いに荷物を積み下ろしする揚場・積み下ろしする荷物を置くための物揚場と呼ばれる置き場が設けられ、道を挟んだ町地の土地を一体として問屋などの商人が使用し、町地には倉庫や店が開かれ荷揚げした品物を取り扱うという、川沿いの土地と町地を一体として取り扱う仕組みが作られました。その中で人々の交流が生まれ、情報交換の中心となっていきました。商人たちが河岸地を幕府・地主から借りる一方で、川に面した大名屋敷には専用の物揚場が設けられました。

こういった幕府が主導となった公的事業としての川の開発が進んでいく一方で、神田の職人街と日本橋の商人街の間を通り、日本橋川と隅田川を結ぶ竜閑川・浜町川が町人たちの手によって、自分たちの費用を用いて開削され、主に職人街への材料輸送経路・製品輸出経路として利用されました。

また、神田川の開削部は「茗溪（めいけい）」と呼ばれ、現在の水道橋にあった江戸の上水道としての神田上水の掛樋とともに、印象的な風景として浮世絵などに描かれてきました。



図 浮世絵に描かれた茗溪

幕末・明治時代（1860年～1910年）-川沿いの空間利用の変化-

二

明治に入り、大名が所有していた物揚場の多くは官有地として接収され、大きな面積を活かして砲兵工廠や印刷局などの工場が作られ、富国強兵・殖産興業の先駆けとなりました。また、庶民が利用していた河岸地についても接収が行われ、川沿いの物揚場の部分のみが「河岸」とされ、当時の東京市の基本財産として市民に貸借が行われ主に物資の輸送に供されました。

明治20年代（1887年～1896年）には財政難解消のために明治政府に縁故のあった政商や個人に払い下げられていきました。同時期に工業化と人口増加に対応するため新川として現在の三崎橋～南堀留橋が開削されました。

一方で、人馬による輸送手段から蒸気機関による動力に転換していき、いままでの大規模輸送手段の中心が水運から鉄道による輸送に転換していく中で秋葉原駅や飯田町駅（現在のアイガーデンエア）には、駅構内に船が入れる舟入り堀が設けられ、鉄道と船舶の間で積み替えが行われるなど、川沿いの土地の役割は輸送・工業の中で大きな割合を占めていました。



図 江戸から明治期にかけての河岸地の分布

関東大震災（1923年～1930年代）-一度目の川空間における転機-

千代田区内の川には大きな転機となる出来事が三つあります。一つ目は、大正12年（1923年）に発生した関東大震災です。

震災で陸上の交通網が寸断される中で川は復興のための輸送経路として利用され、日本橋川では鎌倉河岸（現在の内神田一丁目、二丁目）と堀留（現在の九段北一丁目）付近に限られていた河岸が、鎌倉河岸から飯田橋付近まで連続して主に建設用資材や燃料の荷揚げ用としての物揚場が作ら



図 建設当初の聖橋

れました。

一方で、それまでは手漕ぎ船や帆船といった小型の船舶が舟運の主な船舶だったのに対し、蒸気機関などの動力を用いた大型船化が進み、その通行を可能にするために川底は浚渫され、多くが落橋した橋りょうは現在も残る多くの橋りょうが橋りょうの桁下空間が大きくとられ、橋詰広場が設けられた震災復興橋りょうとして架橋されました。

河岸地の物揚場の部分は川と陸地との境界が川の上端上となったことにより、川に沿うように倉庫が作られ、川沿いのオープンスペースとしての河岸地の利用がなくなり、江戸から続くまちと川をつなぐ河岸地の構造は終焉を迎えました。

第二次世界大戦後（1945年—1950年代）-埋め立てられる外濠

二

二つ目は、第二次世界大戦です。戦災により大量発生した瓦礫の処理のために広大な空間を持つ濠が利用され、真田堀や外濠川、竜閑川といった川が昭和25年（1950年）までに埋め立てられ、川沿いに存在した河岸地とともに、東京市から民間に売却されていき、跡地には道路やオフィスビル等が建設されました。

こうして、江戸時代から連綿と受け継がれてきた水辺空間の一部が失われました。



図 5-2 埋め立てられた外濠(東京駅八重洲口付近外濠)

図 埋め立てられた外濠

首都高速の開通（1960年代） - 川の上の空の喪失 -

三つ目は、高度経済成長期のモータリゼーション時代の到来です。

首都高速の建設は昭和39年（1964年）の東京オリンピック開催に間に合わせるために濠や川、道路などの公共用地を立体的に使う手法が用いられ、日本橋川の上空ほぼすべて、神田川の一部上空を高速道路が通過する風景が出来上がりました。また、橋詰広場は首都高速の出入り口として利用され、姿を消していきました。

時期を同じくして東京市から東京都の基本財産として引き継がれ、維持されてきた河岸地は普通財産に変更され売却が可能になり、貸付地であった河岸地の多くが民間に売却されていき、倉庫としての利用からオフィスビルとしての利用に移り変わっていきました。

また、この頃伊勢湾台風やカスリーン台風といった大型台風での高潮被害が甚大だったことから、護岸堤防の整備がなされ、コンクリートで覆われた現在の水辺風景が完成しました。



図 建設中の首都高速道路

4 ガイドラインの対象エリア

当ガイドラインでは、千代田区内の川空間である日本橋川・神田川を中心に神田川と連続性のある水辺空間である外濠エリアを対象とし、現状・将来像の整理を行います。

対象エリア

日本橋川エリア…神田川との分流地点である三崎橋から中央区との区界である常盤橋までの区間

神田川エリア…神田川の区内の飯田橋から下流の中央区との区界になる左衛門橋までの区間

外濠エリア…飯田橋から弁慶堀までの区間

対象範囲

川・濠（護岸から）200m・30mの範囲

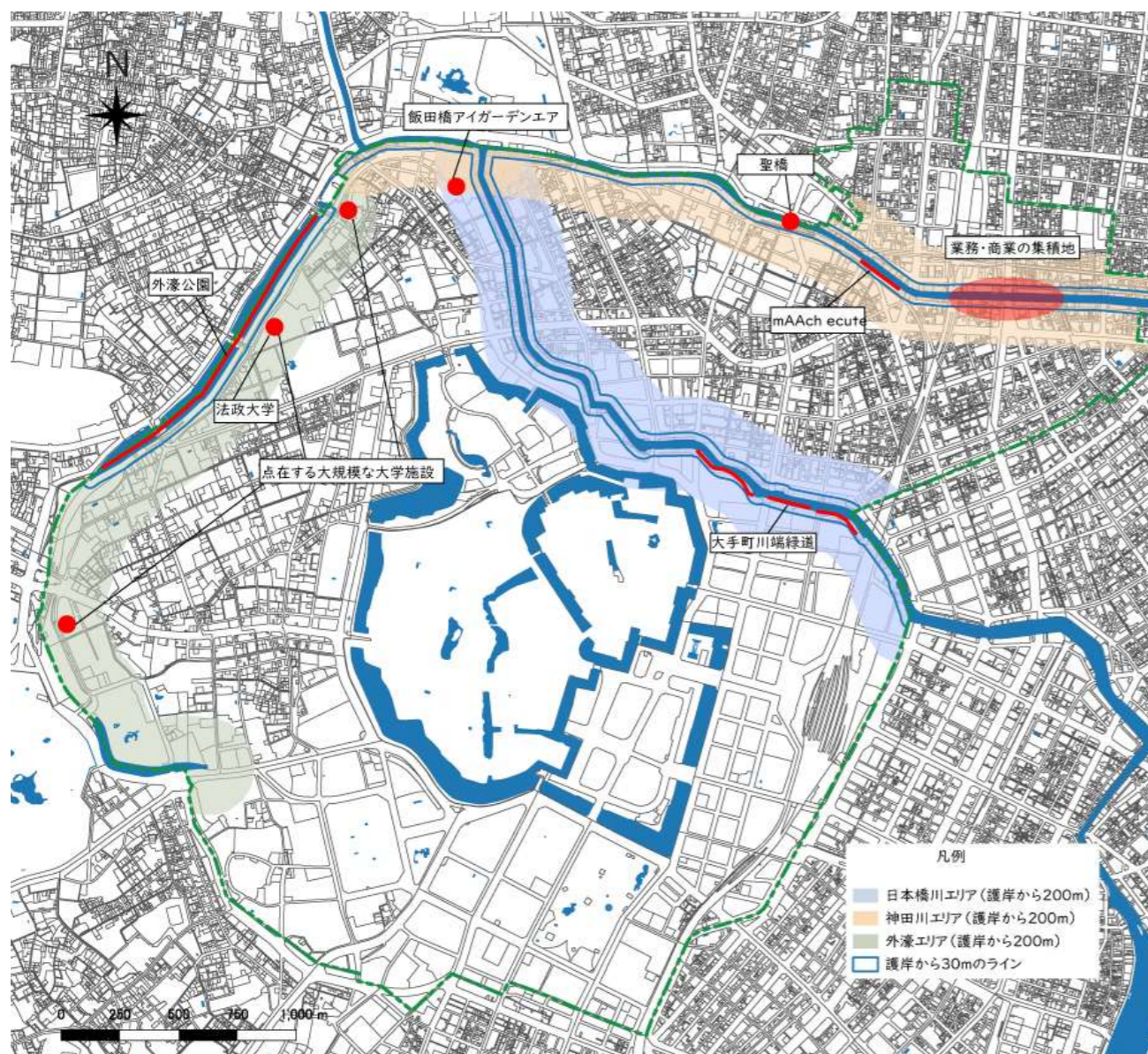


図 対象エリア位置図

5 エリア別の概況

日本橋川エリア

日本橋川エリアは、川の上空のほぼ全域を首都高が覆っています。エリアの大部分は大規模な公共施設・業務施設となっており、住宅地はごくわずかとなっています。川の上流側には飯田橋アイガーデンエア近くの整備された歩道、下流側には大手町川端緑道があり、一部区間ではあるが親水性の高い歩行者空間が整備されています。



飯田橋アイガーデンエア



大手町川端緑道

神田川エリア

神田川エリアは、エリア別に大きく様子が異なり神保町～万世橋地域では台地の底を流れる川を市街地から見下ろす自然豊かな地形となっており、万世橋～和泉橋地域では業務・商業の集積地の中心を流れる都市河川となっています。

また、万世橋～和泉橋地域では mAAch ecute をはじめとした水辺を眺めることのできる施設も点在しています。



御茶ノ水橋からみた聖橋と神田川



mAAch ecute

外濠エリア

外濠エリアでは、市街地と水辺空間の間に鉄道が走っていて、水辺との距離はあるものの、川に沿って公園が広がっており、桜をはじめとした自然と外濠の歴史性を感じさせる空間となっています。また、付近には大規模な教育施設が点在し、落ち着いた街並みとなっています。



対岸からみた法政大学



外濠公園の桜

第 2 章 千代田区の川沿いの現状

1 対象エリアの人口・世帯数推移

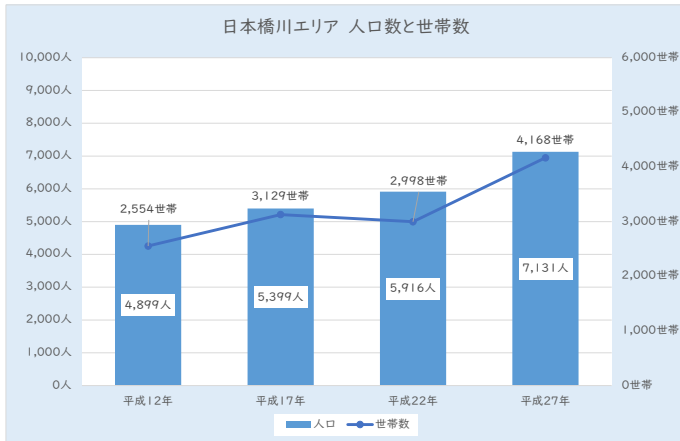


図 日本橋川エリア人口と世帯数

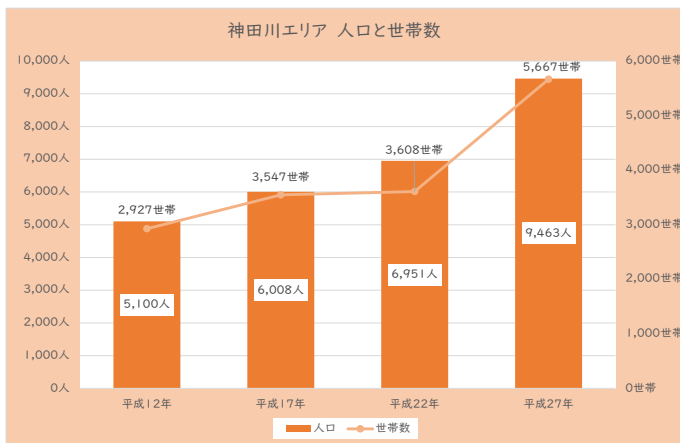


図 神田川エリア人口と世帯数

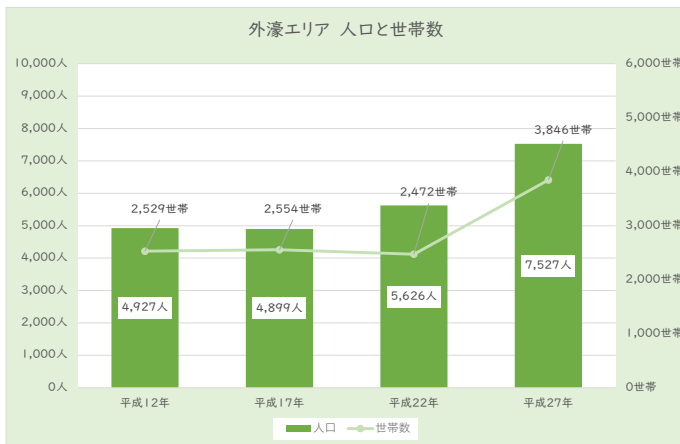


図 外濠エリア人口と世帯数

平成 27 年の人口は日本橋川エリアで約 7,100 人、神田川エリアで約 9,400 人、外濠エリアで約 7,500 人となっています。(平成 27 年度国勢調査より)

全エリアとも人口は増加傾向にあります。中でも神田川エリアは平成 12 年と比較し、約 2 倍にまで増加しています。

世帯数については、全エリアとも平成 22 年から平成 27 年の間で大きく増加しています。

なお、日本橋川エリアでは、世帯数の増加率が 1.6 倍程度、人口の増加率が 1.4 倍程度となっており、少人数世帯が増加していると推測されます。

※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計 資料：国勢調査より作成

2 対象エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

日本橋川エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

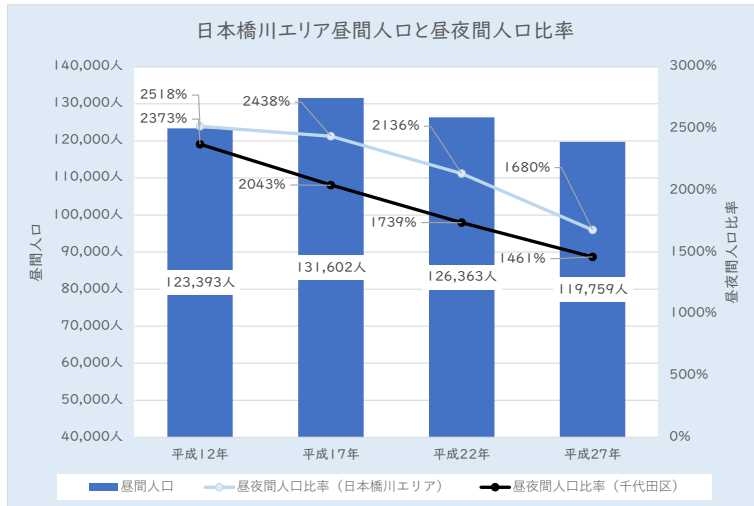


図 日本橋川エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

日本橋川エリアでは、全体的な昼間人口は平成12年から平成27年にかけて大きな変化はなく、10万人を超える高い値を維持しています。

一方で昼夜間人口比率は、人口が増加している影響から低下が続いていますが、日本橋川エリアの昼夜間人口比率の値は千代田区全体の値を上回った値を維持し続けています。

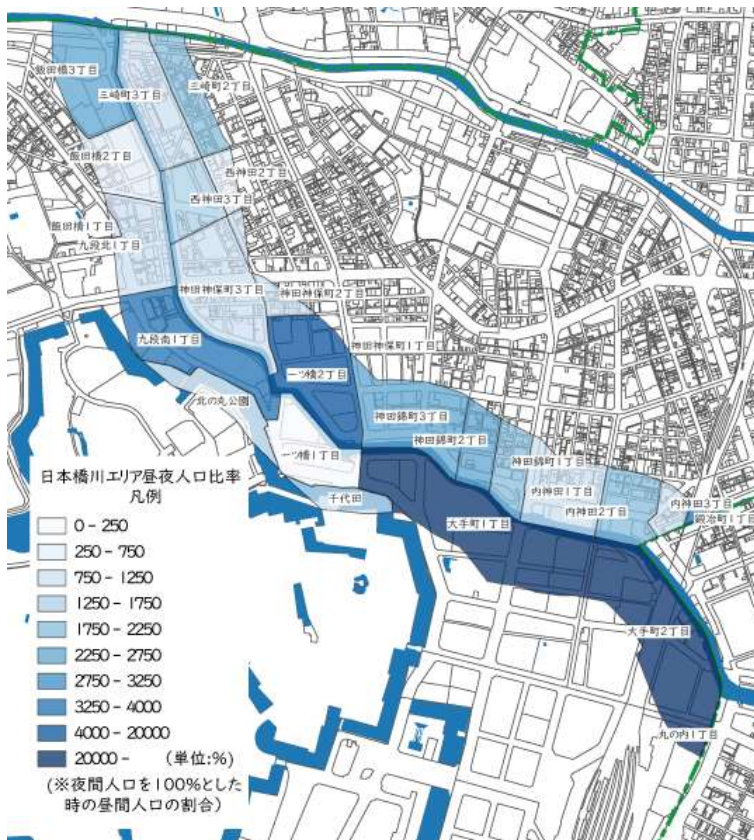


図 日本橋川エリア内各町丁目別の昼夜間人口比率

エリア内の昼夜間人口比率をみると、大手町・丸の内の町丁目については比率がとて大きくなっており、エリア内でも特に就業・就学者の多い町丁目となっています。一方で上流の町丁目にあたる神保町、西神田、三崎町といった町丁目では千代田区平均を下回るもしくは同等の昼夜間人口比率となっており、定住者が比較的多い町丁目となっています。

※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計 資料：国勢調査より作成

神田川エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

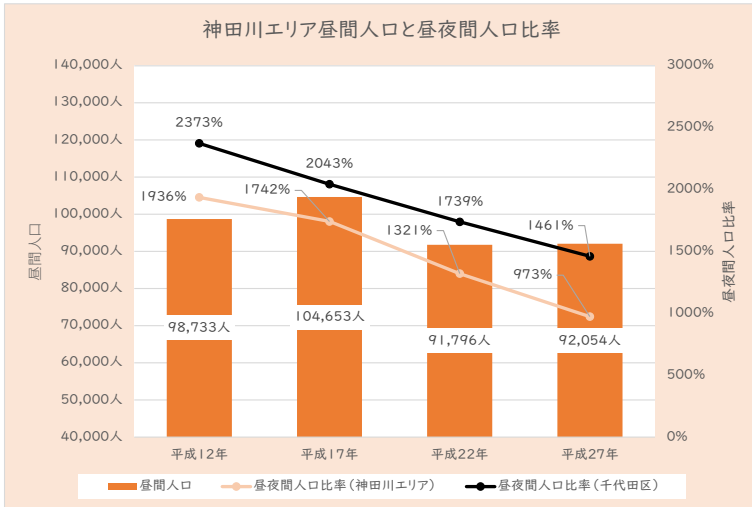


図 神田川エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

神田川エリアでは、昼間人口は平成12年から平成27年にかけて増減しながら平成27年度時点では9万人強の数字となっています。

昼夜間人口比率をみると、千代田区全体の数字を全年で下回ったまま低下しており、平成27年には定住人口が増加した影響もあり、1000%を下回っています。

エリア内の昼夜間人口比率をみると、神田川の下流側東神田や神田佐久間町三、四丁目については比較的値が小さく、秋葉原周辺の外神田や神田佐久間町一丁目の値が大きくなっています。

一方で駿河台から西側についてはほとんどの町丁目では1300%を超える値となっています。

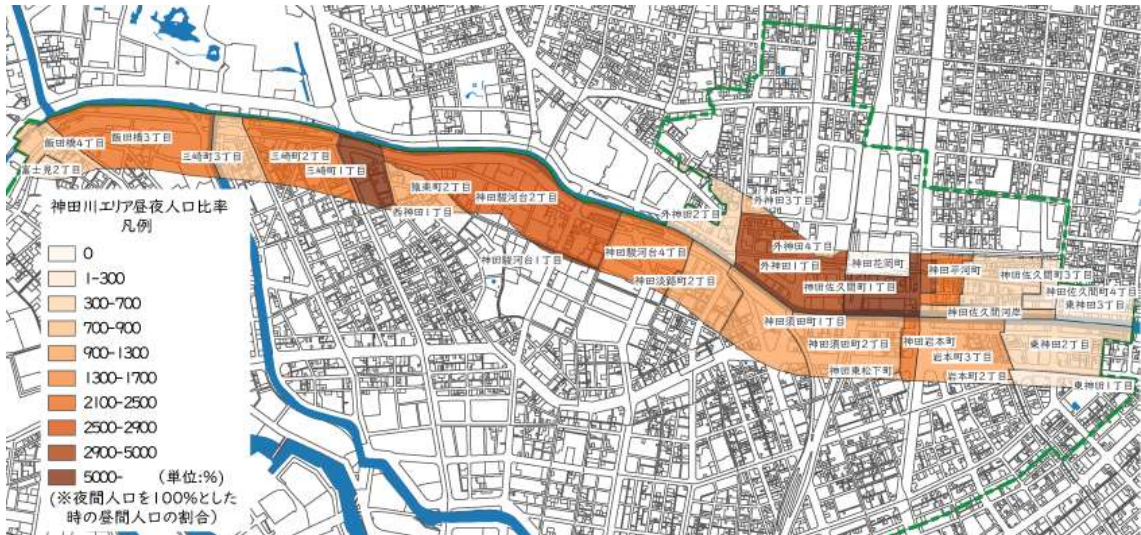


図 神田川エリア内各町丁目別の昼夜間人口比率

※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計 資料：国勢調査より作成

外濠エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

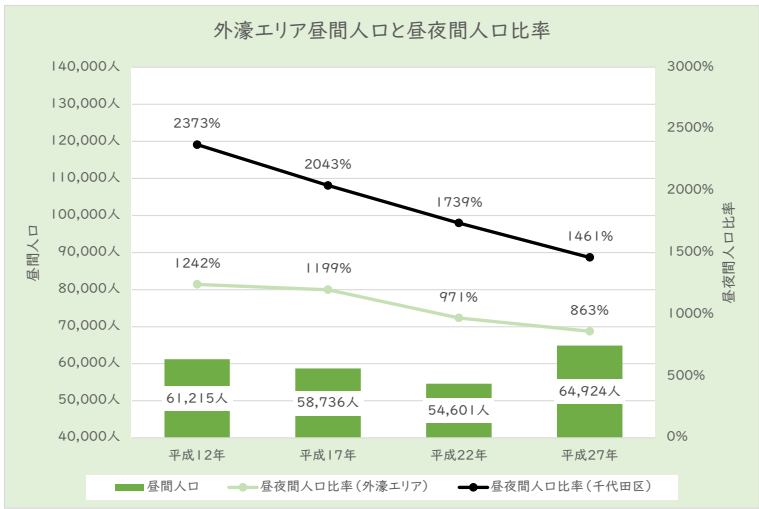


図 外濠川エリアの昼間人口と昼夜間人口比率

外濠エリアでは、昼間人口は他のエリアと比較し少ない数となっており、平成12年から平成27年にかけては微増しているものの、約65,000人となっています。

昼夜間人口比率をみると、千代田区の値を大きく下回って推移しており、平成27年には863%となっています。

エリア内の昼夜間人口比率をみると、大学や企業が集中している麴町五丁目、紀尾井町の値が大きくなっています。一方、富士見二丁目や番町地域では1,000%以下の値の町丁目が中心となっています。

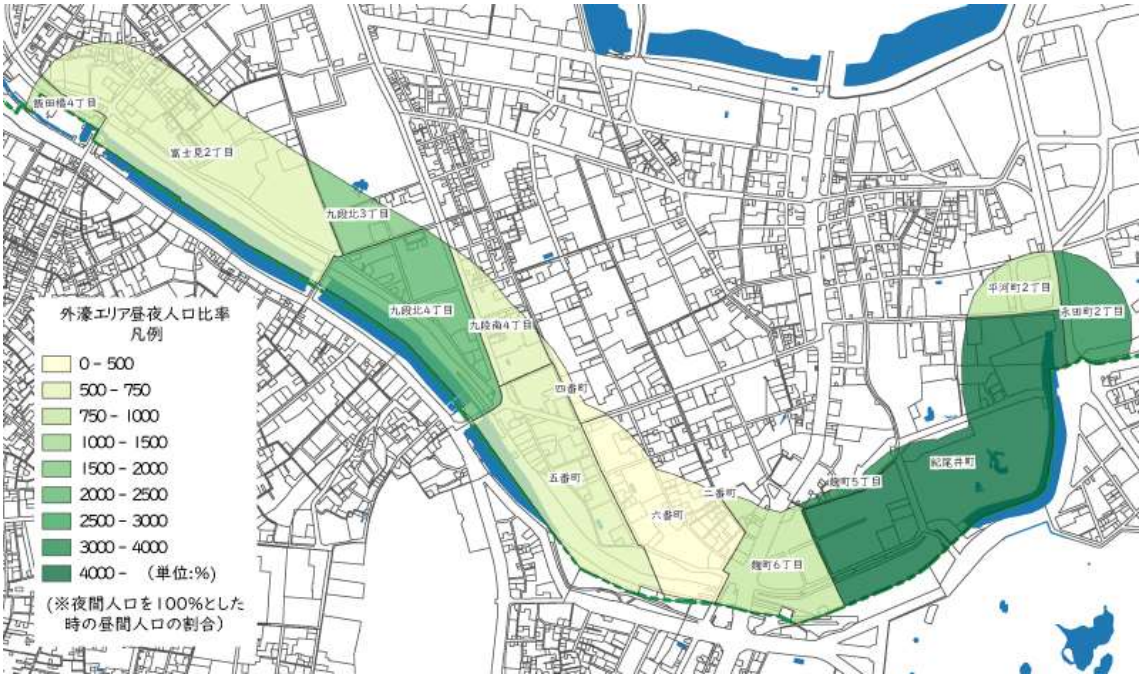


図 外濠エリア内各町丁目別の昼夜間人口比率

※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計 資料：国勢調査より作成

3 区民の川に対する意識

令和 3 年度に千代田区が行った区民世論調査で、区民が川に対して「どのようなイメージを持っているか」のアンケート調査の結果です。

3つの項目について、次のような回答が得られました。

- ・ 区内の水辺環境の満足度
- ・ 満足していない理由
- ・ 水辺でしたい活動

区内の水辺環境の満足度

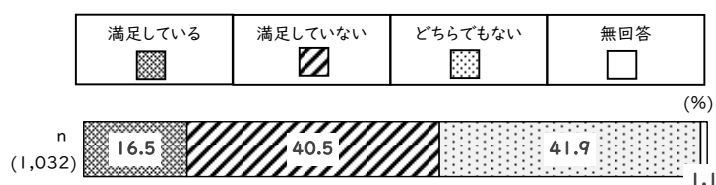


図 区内の水辺環境の満足度

区内の水辺環境の満足度では、「満足していない」が 40%と高い割合を示し、「どちらでもない」の回答を除外すると満足している人の割合は 20%を切っています。

(水辺環境に) 満足していない理由

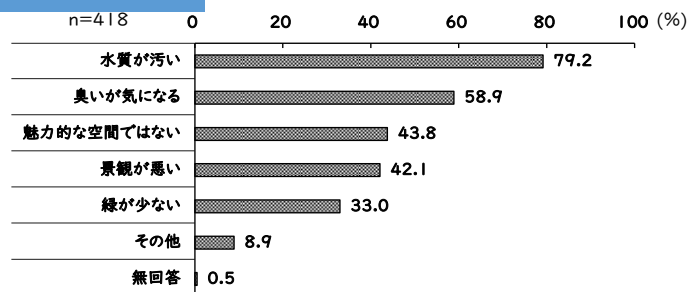


図 満足していない理由

満足していない理由では「水質が悪い」が 79%と最も高く、次いで「臭いが気になる」、「魅力的な空間はない」、「景観が悪い」の順番となっています。

水辺でしたい活動

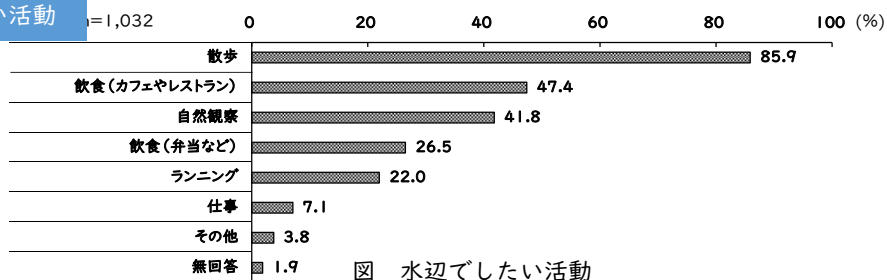


図 水辺でしたい活動

水辺でしたい活動では、「散歩」が 85%と最も高く、次いで「飲食（カフェやレストラン）」が 47%と高くなっています。

4 土地利用

土地利用については、エリアごとに全体の分析を行うとともに、地域ごとの特性を把握するため、都市計画マスタープランにおける7つの地域区分を基に分析を行いました。

日本橋川エリア

全体

業務・商業用地が約7割を占め、次いで公共用地が2割弱となっており、住居系地域の割合は小さくなっています。

①神保町・飯田橋地域 (神田三崎町～一ツ橋一丁目・飯田橋三丁目～一ツ橋二丁目)

合同庁舎など大型の公共施設が立地しており、公共用地の割合が日本橋川エリアでは最も大きくなっています。

②神田公園地域 (神田錦町三丁目～内神田二丁目)

沿川には業務施設が立ち並び、地域の大半を業務・商業用地が占めています。

③大手町・丸の内・有楽町地域 (大手町一丁目～大手町二丁目)

大規模なオフィスビル・公共施設が立ち並んでおり、日本橋川沿川では再開発計画が一体的に進められています。



図 日本橋川エリアの土地利用現況図

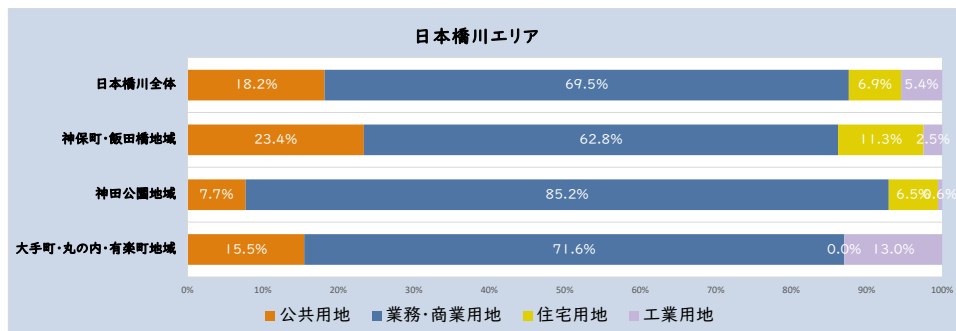


図 日本橋川エリアの土地利用割合
※沿川 200m の範囲を集計 資料：平成 28 年度土地利用現況調査

神田川エリア

全体

全体を通して業務・商業用地が多くを占め、地域ごとに土地利用の特徴の差が大きくなっています。

①和泉橋地域（神田佐久間町一丁目～東神田三丁目・神田須田町二丁目～東神田二丁目）

和泉橋地域には、小・中規模の業務系施設が多くまた秋葉原駅に近い場所では商業系の建物が多くを占めています。一方で、下流側に行くに従い中規模の住宅の割合が増えています。

また、公共用地が占める割合は全地域で最も小さくなっています。

②万世橋地域（外神田二丁目～外神田一丁目・神田駿河台四丁目～神田須田町一丁目）

秋葉原駅を中心に大規模な商業・業務施設が集積する一方、神田川に近い地点では小規模な商業施設が多くなっています。

③神保町・飯田橋地域（飯田橋四丁目～神田駿河台二丁目）

駿河台周辺に大きな病院などがあり、公共用地に占める割合は神田川エリアの中で最も大きくなっています。



図 神田川エリアの土地利用現況図

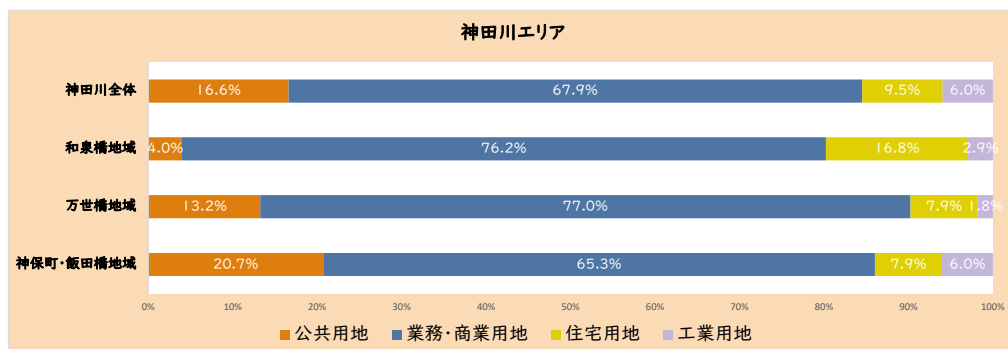


図 神田川エリアの土地利用割合

※沿川 200m の範囲を集計 資料：平成 28 年度土地利用現況調査

外濠エリア

全体

公共用地が、その他エリアに比べ大きな割合を占める地域です。また、住宅用地の割合も3エリアの中では最も大きくなっています。

①麴町・番町地域（紀尾井町～五番町）

沿川の公共用地としては大規模な敷地を持つ大学が大きな割合を占めています。また、小規模な住宅が点在しており、相対的に業務・商業用地の割合は小さくなっています。

②飯田橋・富士見地域（九段北四丁目～飯田橋四丁目）

大規模な大学・病院が存在し、公共用地の占める割合が大きいが一方、再開発による高層住宅が数か所完成しており、住宅用地の割合も大きくなっています。



図 外濠エリアの土地利用現況図

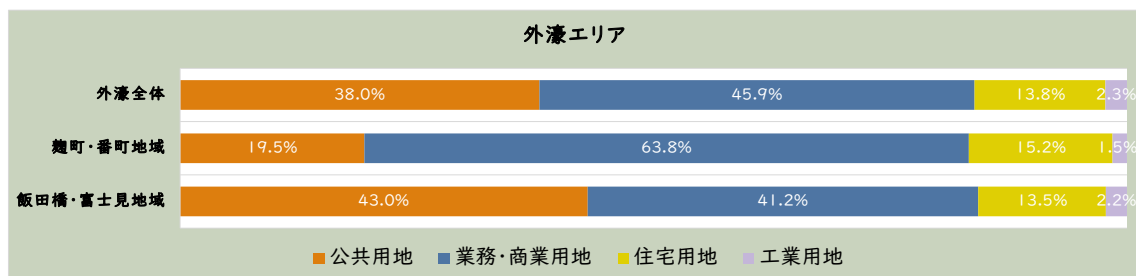


図 外濠エリアの土地利用割合

※沿川 200m の範囲を集計 資料：平成 28 年度土地利用現況調査

各エリアの比較考察

各エリアの土地利用の現況を分析した結果、以下のような結果がわかりました。

日本橋川エリアでは、全体にわたって業務・商業用地の割合が大きくなっているほか、川沿いには大規模な公共用地がいくつか広がっており、連続して公共用地が繋がっているような箇所も見られます。

神田川エリアでは、同じく業務・商業用地の割合が大きくなっていますが、地域ごとに住宅用地・公共用地の割合が異なっています。特に下流（和泉橋地域）は住宅用地の割合が大きく、公共用地の割合が小さくなっており、上流（神保町地域）は住宅用地の割合が小さく、公共用地の割合が大きくなっています。

外濠エリアでは、他エリアに比べ業務・商業用地の割合が少なく、公共・住宅用地の割合が多くなっています。中でも飯田橋・富士見地域は大規模な教育施設や病院が点在し、公共用地の割合が多くなっています。

以上のことから、千代田区の川沿いには基本的に業務・商業用地が集合しており、建築物が立て込んでいます。その中にある公共用地は比較的土地の面積が大きくなっています。

5 地域資源

地域資源として、人々が立ち寄れる施設や特徴的な歴史資源、神社仏閣、滞留空間としての公園の抽出を行いました。

橋りょう

区内の川にかかる橋りょうは、関東大震災後に架橋された震災復興橋りょうと呼ばれる橋りょうが大半を占めています。

これらの橋りょうは当時の先進技術を用い、美観と機能を兼ね備えた橋りょうとして、千代田区景観まちづくり重要物件に指定されています。



公園

区内には多くの公園が点在していますが、国民公園である皇居外苑、千鳥ヶ淵戦没者墓苑、都立公園である日比谷公園を除き、児童遊園や区立公園が主となっています。

児童遊園や区立公園の多くは、橋詰空間や街中にある空地を利用した小規模な公園となっています。

大規模店舗

区内には大規模店舗が 53 か所存在し、東京駅周辺、秋葉原周辺、神保町周辺にその多くが集積しています。川沿いのエリア内に存在するのは秋葉原周辺にある大規模店舗が多くを占めており、家電量販店が中心となっています。

神社・寺院

神社・寺院は区内に 15 か所存在し、東京大神宮や靖国神社、神田明神といった神社が点在しています。また、川沿いにも 5 か所の神社・寺院が存在しています。



文化財

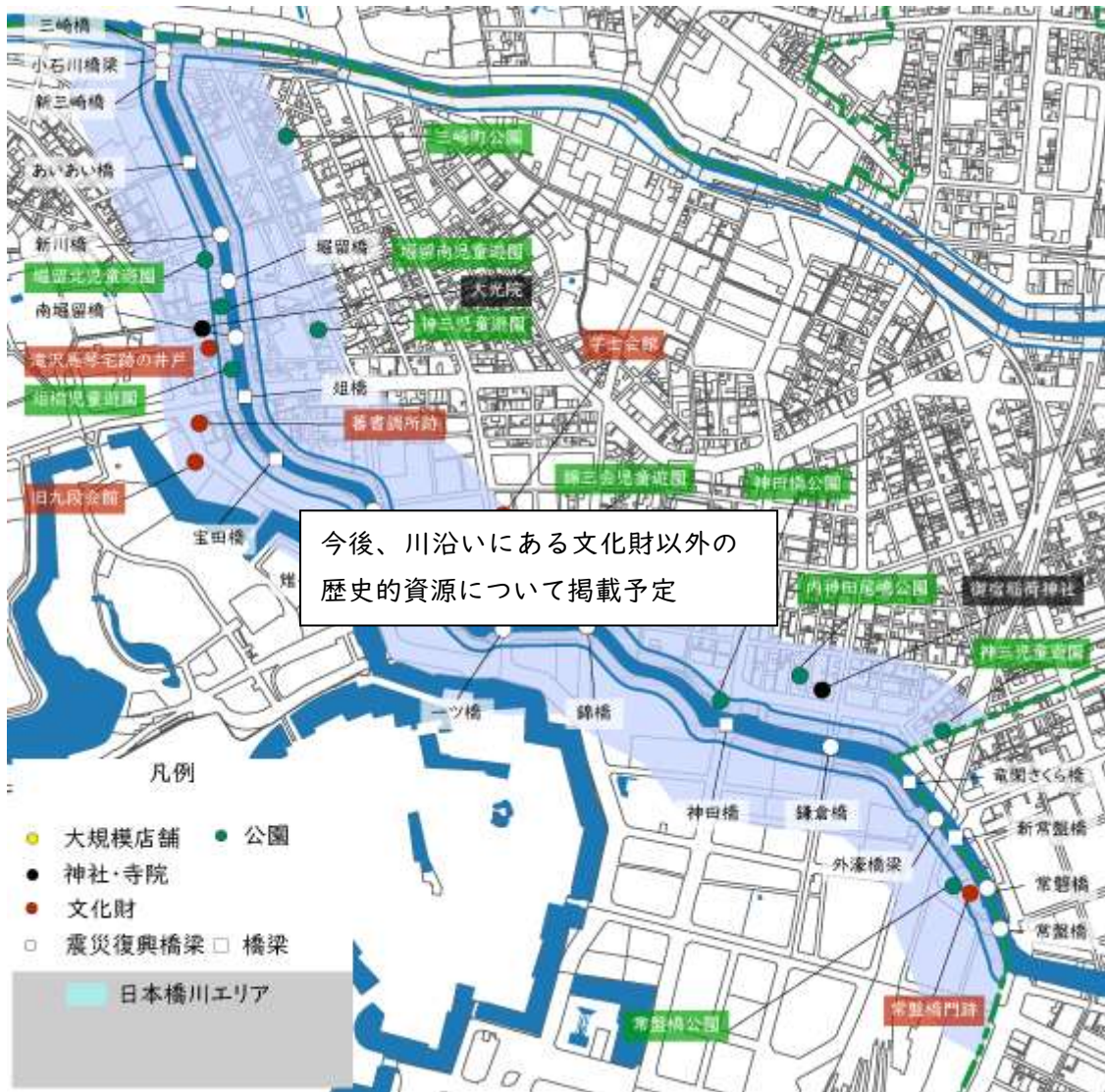
千代田区内には江戸時代から明治時代にかけての文化財が多く、現在では国指定文化財が 13 件、国登録有形文化財が 10 件、東京都指定文化財が 17 件存在しています。

日本橋川エリアの資源

日本橋川エリアでは、いくつかの小規模な公園が点在しています。

また、近年再開発が行われた飯田橋アイガーデンエアや大手町地区の現在進行中の再開発地区では沿川の歩道整備が進んでいます。

以下に日本橋川エリアに存在する資源の一覧を示します。



雉子橋



常盤橋門跡



旧九段会館

神田川エリアの資源

神田川エリアでは、万世橋地域周辺を中心として大規模な商業施設が集積しており、周囲のオフィスビルも含めて、商業的な利用が盛んになっています。その中にいくつか規模は小さいものの橋詰空間を利用した公園が点在しています。

川沿いには柳森神社や三崎稲荷神社といった川に面した神社が存在しています。



外濠エリアの資源

外濠エリアでは、外濠の脇には、鉄道および線状に広がる外濠公園や児童遊園があり緑の多い落ち着いた雰囲気のあるエリアとなります。

飯田橋サクラテラスでは、外濠の景色が楽しめるテラスなど設けております。



6 各エリアの景観特性

日本橋川エリア

日本橋川エリアでは、全域を通して日本橋川の護岸整備により、川までの高低差があり水面の印象が薄くなってしまっています。

上空には首都高速が全区間にわたって通っており、頭上の閉塞感が強い印象を与えています。

また、沿川の多くの箇所建物で建物が立ち並び、川を通じた良好な見通しは確保されていません。一方で、再開発により川沿いに樹木の植えられた幅広な歩道空間が確保されるなど、水辺に顔を向けたまちづくりの取組みが始まっています。



首都高により閉塞感がある日本橋川

神田川エリア

和泉橋地域では下流になるにつれ川幅が広くなり、川の上空には空の広がりを感じられますが、階数の高いビルが川近傍に林立しており、橋の上からではないと川の存在は確認できません。

万世橋地域では、昌平橋・万世橋とアーチ形の戦災復興橋りょうが続いています。その沿川には旧万世橋駅の赤レンガがあり、その上を鉄道が通過しており、土木建造物が織りなす複合的な景観となっています。

御茶ノ水付近は江戸時代に台地を開削して作られた場所であり、その部分だけ周辺の土地に比べ水面の位置が低くなっているため、川も若干蛇行しています。

そのため、都心には珍しい渓谷のような景観になっており、江戸時代には茗溪として町民に親しまれていました。さらに、その上にかかるアーチが特徴的な聖橋とともに象徴的な風景となっています。



昌平橋付近の神田川と鉄道が織りなす複合的な景観



聖橋方面

神保町・飯田橋地域では、護岸に沿ってビルが立ち並び、護岸整備により川の上空にのみ空間が抜けたような印象を与えている一方、周辺地域からはビルにより川への眺めが遮断されているため、川がある印象は薄くなっています。

外濠エリア

飯田橋・富士見地域では、沿川に階数の高いビルが並び、上空に首都高速が通っており、川の上空にも閉塞感が生まれています。飯田橋駅付近で川面が見られますが、大きな交差点と一体となっており、川の印象は薄くなっています。



外濠公園からみた外濠

外濠エリア全域では、外濠沿いに線状に続く公園から線路を挟む形ですが、外濠を見下ろすことができ、また、公園には多くの樹木が並び、都心では貴重な緑と水を感じられる空間になっています。

7 眺望点とランドマーク

各エリアにおける眺望が望める箇所、および地域のランドマークとして目立つ建築物の抽出を行いました。

日本橋川エリアにおいては、首都高速が川の上空を覆っている関係から常盤橋公園付近の一部でしか川を活かした眺望が望める箇所はありません。



図 日本橋川エリア眺望点とランドマークとなる建物

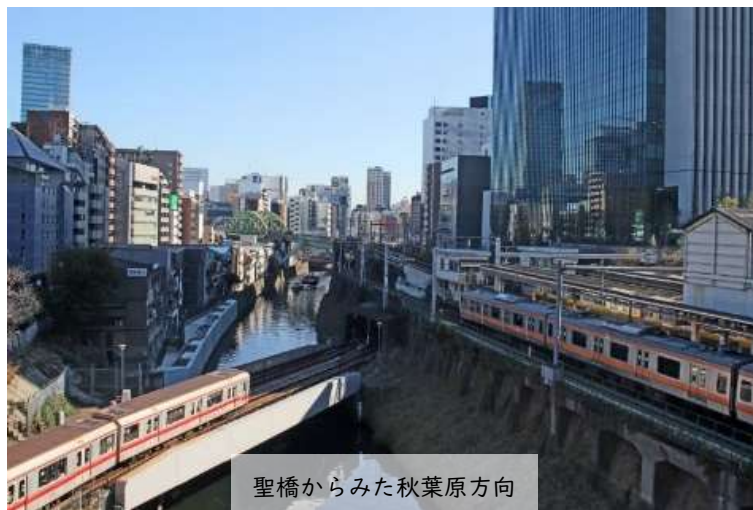


神田川・外濠エリアでは川にかかる橋りょうのほとんどから眺望が望めます。神田川エリアでは水道橋からお茶の水にかけて、台地を登っていく路上から連続して川を見渡し、対岸の緑を見渡せます。

また、聖橋からは、ニコライ堂や神田川と川面をまたぐ地下鉄丸ノ内線、高い位置で川をまたぐJR線が見られるビューポイントとなっています。



図 神田川エリアの眺望点とランドマークとなる建物



外濠エリアでは外濠公園を通して連続した眺望が望めるほか、四ツ谷付近では橋の上から聖イグナチオ教会が望めるなど、特徴的な眺望があります。



図 外濠エリアの眺望点とランドマークとなる建物



8 水辺に近づく場所

水辺に近づく場所として、「川と歩行者の動線の間には障害物がない」、「水面に近づくことが可能である」ということを条件に整理を行いました。

日本橋川エリアでは、護岸整備により水面と歩道との間に高低差があります。加えて、沿川にも建物が多く立ち並んでおり、水辺の近くまでアクセスできる地点は限られています。

一方で、近年再開発が行われた飯田橋アイガーデンエアや大手町川端緑道では川に面した歩道の整備が行われ、幅員の広い歩行空間が確保されるとともに、川に面したベンチなどの休憩施設が配置されるなど、水辺に近づく空間の整備が行われています。

また、水面に近づく箇所として防災船着場（新三崎橋前、千代田区庁舎前）があります。

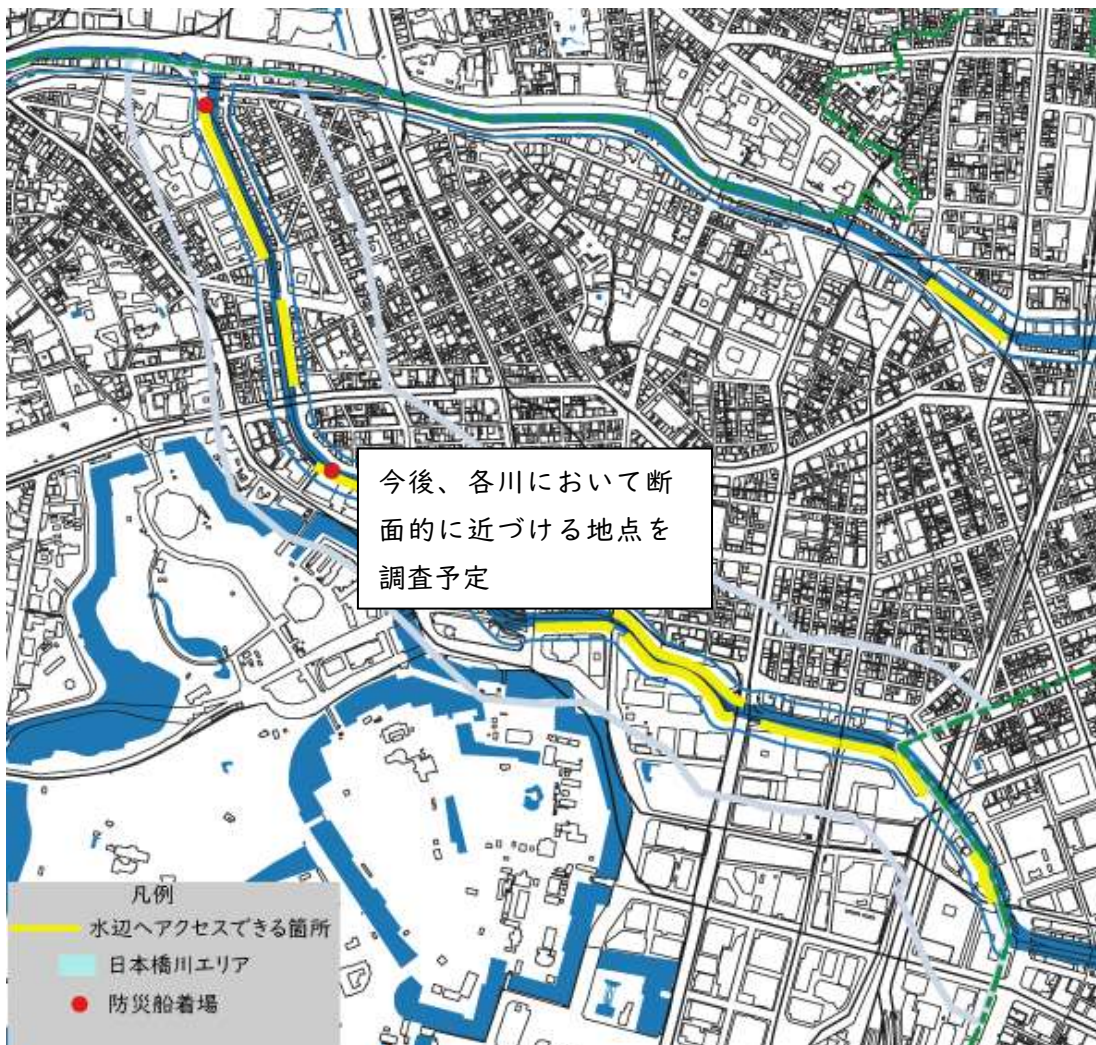


図 日本橋川エリア水辺に近づく箇所

神田川エリアでは、神保町地域～万世橋地域にかけて、鉄道が川と市街地の間を通っており、また、川が谷底を通っているため、川に近づける地点は少なくなっています。

一方で、万世橋地域には川沿いのテラスを設けた mAAch ecute があり、水辺に近接した商業施設となっています。

和泉橋地域では、和泉橋防災船着場に隣接した広場から、階段状になった敷地形状により水面近くまでアクセスすることができるほか、ホテルの中の飲食店にテラスが設置されている場所もあります。また、橋詰に設けられた小規模な公園では、水辺の近くに行くことができます。



和泉橋船着場の広場

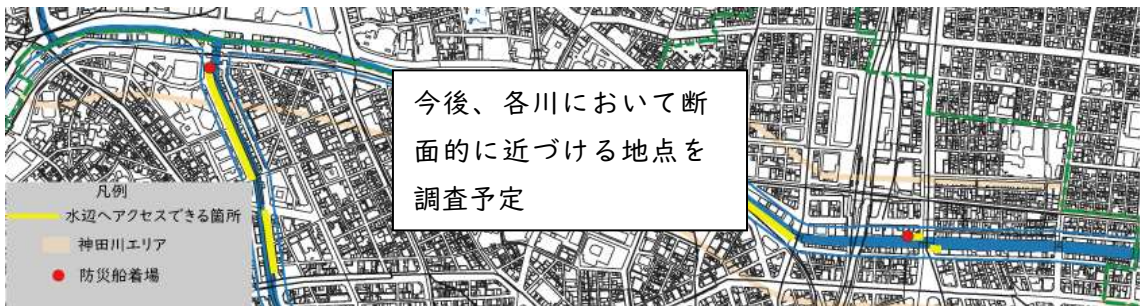


図 神田川エリア水辺に近づける箇所

外濠エリアでは、川沿いに線状に連なる公園から、鉄道を挟んで外濠を見下ろすことができ、川に近づける地点もあります。



図 外濠エリア水辺に近づける箇所

区内のエリア別の現状を整理すると以下のとおりとなります。

日本橋川エリアでは、人口の増加が 3 エリアの中だと最も緩やかであり住宅用地が土地利用に占める割合も小さくなっています。地域資源としては震災復興橋りょうが多く日本橋川にかかっており、また水辺にアクセスできる箇所も多くなっています。

神田川エリアでは人口・世帯数の増加が 3 エリアの中で最も大きくなっています。また、公園・眺望点が多く存在し、川を近くで感じられる箇所が点在していることがわかります。

外濠エリアは住宅用地の割合が大きく、人口増加率に比べて世帯の増加率は緩やかになっています。また、神田川エリアと同じく眺望点が多く存在し、川をみることのできる箇所の活用が望まれます。

9 川沿いの現状を踏まえた課題

共通の課題

分断された川沿いのまちづくり

歴史ある橋りょうや文化が感じられる神社・寺院が活かしきれてなく、川沿いの建築物は背を向けています。

川は、まちとまちを通っていますが、川沿いはつながりがないものとなっています。川からまちへとつながりのあるまちづくりが求められています。

水辺にアクセスできる地点を含めた回遊性の向上

水辺に近づく空間は川沿いに存在していますが、それぞれが独立しており、回遊性に乏しいため、周辺施設の空地も含めた全体の回遊性を図る必要があります。

水質の向上

川は「汚い」「臭い」というマイナス意識が根強いいるため、さらなる水質改善が求められます。雨天時の汚水の流入や流れの滞留などが発生しているため、導入水量の増加や流入する雨水の分流などにより河川水質を向上させ、環境の改善を図る必要があります。

川沿いの閉鎖空間と背を向けた建築物

建築基準法、その他河川管理上の規制により、川沿いの建築物は川に対して背を向けて建てられてしまう傾向があります。また川沿いは建て詰まっており、場所によっては高速道路に覆われ閉鎖的な空間が存在します。mAAch ecute のように川沿いに人が憩える場所を設け、川に顔を向けられる建築物を増やし、つなげていくことが重要です。

地域別の課題

日本橋川エリア

業務集積地における空地の拡充

神田公園地域、大手町・丸の内・有楽町地域では業務・商業用地が大半を占め、公園などオープンスペースは非常に少ない状況になっており、人々が滞留できる箇所が求められます。

そのため、日本橋川の橋詰空間・水辺の歩行空間の活用が考えられます。

川とまちの一体感の改善

現在、川とまちの間は多くの地点で沿川にビルが立ち並び、川とまちとの一体感が感じづらくなっており、旧来の川を境界としたまちの特性の違いとともに、街並みの一体感が低下しています。

そのため、川を使ってまちとまちをつなぐための川に開いたまちづくり形成を図る必要があります。

川の上空の閉塞感

首都高速が川上部空間を覆い、川に背を向けて建築物が立ち並んでいるために、閉鎖的な空間となっており、日常的に人々が川の実在を感じるのは橋の上からや点在する川に面した空間が中心となってしまっています。

このため、生活の中で人々は川が身近なものとなっておらず、活用する機会が少なくなっています。

神田川エリア

都心の渓谷のような景観の保全

御茶ノ水近辺の貴重な渓谷のような景観について、千代田区側においては鉄道施設が川に面しており、擁壁のような構造になっているため、緑化などのつながりがありません。景観の保全を図る必要があります。

地域間の移動の円滑化

神田川が通るエリアは、幹線道路・神田川により歩行者の移動経路が限られた動線となっています。

川沿いの歩道の整備や新たな歩道空間の拡充などを行い快適な歩行空間を形成することで歩行者の地域間移動の円滑化が図られると考えられます。

大規模集客施設との連携

秋葉原周辺では、沿川も含め大規模集客施設が多く存在します。

拠点となる秋葉原駅から集客施設を通じて、エリア全体のさらなる活性化を図り、地域振興につなげていく必要があります。

外濠エリア

歴史ある自然を活かした景観形成

外濠沿いの公園の樹木を活かし、現状の雑然とした空間を江戸時代からの土手としての歴史性を活かした、樹木による都心の貴重な憩いの空間の質の向上を図る必要があります。

大学などの大規模施設との連携

大学などの大規模施設を中心に、周辺の公園・広場・民地と連携をとり、住む人や訪れる人にとって更に魅力のある場所にする必要があります。

外濠を挟んだ隣接区との連携

外濠エリアは千代田区の新宿区と港区との区界に位置しています。区を超えて外濠周辺の道路等の意匠や、サイン類の統一などを行い、外濠周辺を移動する歩行者が歩きやすく、心地よい空間を作っていく必要があります。

10 川沿いの空間が持つ機能・ポテンシャル

川沿いの空間が持つ機能を、歴史的な背景、現状の分析から抽出すると以下のような分類となります。

防災

- ・ 治水機能の維持
- ・ 舟運を利用した災害時輸送
- ・ 空地としての運用

観光

- ・ 歴史的資源
(震災復興橋りょうなど)
- ・ 眺望点からの眺め
- ・ 防災船着場を活用した舟運観光
のさらなる充実
- ・ 江戸時代の資源の活用
- ・ オープンスペースとしてのイベント利用
- ・ 橋りょうと周辺建物の組み合わせ
による景観形成

にぎわい

- ・ 商業施設の集積
- ・ 交通の拠点としての橋りょうの機能
- ・ 新たな歩行者用通路としての川
空間の利用
- ・ オープンスペースとしての利用
- ・ イベントやアクティビティとしての
川の利用

環境

- ・ 風を感じる場所としての利用
(移動経路・滞在)
- ・ 橋詰空間を利用した公園
- ・ 水質改善による生物多様性
- ・ 堤防上空間などの緑の豊かさ
- ・ 休息を与える空間としての水辺

千代田区の川沿いの空間の課題と川沿いの空間が持つポテンシャルを合わせて考慮すると、目指す方向性は以下ようになります。

休息できる空間が不足しているため、川の風を感じる場所としてのポテンシャルをいかした休息空間の充実

水質を改善し、川そのものの環境価値の向上

点在する歴史的資源・歩行空間に連続性を持たせる

第 3 章 川沿いのまちづくり実現に向けたビジョン・方針

1 全体ビジョン

千代田区に住み・働き・学び・訪れる人々で共有する、千代田区の川沿いのまちづくりの将来像として以下の全体ビジョンを定めました。

川が歴史・まち・人の活動をつなぐ

区内の河川は、江戸時代から生活に欠かせない輸送経路であり、水運を中心とした街の発展に寄与するとともに、そこで様々な人々の活動・交流を生み出してきました。

しかし、時代の移り変わりとともに、人々の生活の中で欠かせない存在であった川は、川沿いの空間が変化し、川の存在はまちと離れたものになってしまっています。

そこで、川とまちが一体となった歩きやすくなる空間や、水と風を感じながらまちとまちをつなぐ空間を創出するにより、かつてのように、川を人々の生活にとって身近で居心地の良い場所とすることで、千代田区における川の歴史だけでなく、まちとそこで活動し、滞在する人々をつないでいくことを目指します。

このような認識のもと川沿いのまちづくり実現に向けた全体ビジョンを「川が歴史・まち・人の活動をつなぐ」と定めます。

つながりが連想されるイラスト
(予定)

2 川沿いのまちづくりの方針

将来像の実現に向けて、4つの川沿いのまちづくり方針を定めました。この方針に基づき、区内の多様な活動主体の取組みを推進していきます。

方針

①

川に人々の意識を向ける～川の魅力の再発信～

(1) 川沿いの魅力の発信

- 駅や施設等の拠点から水辺へのルート上に分かりやすい案内サインなどの設置や、歩きやすい川沿いの演出を推進します。
- 川だけでなく、周辺の施設と連動したイベント等により、川の魅力を一層向上させていくことを推進し、川のある風景、川ににぎわいのある風景を地域に定着させていくことを目指します。



▲大手町川端緑道でのイベント

(2) 川の環境整備

- 川に対する「汚い」「臭い」というマイナス面のイメージ改善に向け、東京都が計画中である外濠浄化に向けた基本計画に基づく日本橋川・神田川の水質改善の取組みと連携しながら、水質改善に向けた取組みを推進します。
- 川沿いを歩いて気持ちの良い空間とし、川沿いで人々の活動が創出されるように、まちから川が見え、まちとつながりが感じられるような建築・修景等を推進していきます。



▲日本橋川の河川内緑化

方針
②

川に開いたまちづくり～水を活かした空間の創出～

(1) 川を近づきやすいものにする

- 歴史資源等を活かした橋りょうの演出・管理を推進し、川を通じた千代田区の歴史に対する認知度向上と、人々の川沿い空間に対する愛着形成を進めます。
- 駅や施設等の拠点と川を結ぶルートや、建物等から川を望むことができる視点場の創出、その案内の設置等、川と人をつなげる環境整備を推進します。



▲舟を用いたライトアップ実験
(Tokyo Under Wonder)の様子

(2) 川沿い空間の活用の幅を広げる

- 防災船着場は、水面とまちをつなげる重要なポイントであることから、非常時だけでなく日常的な舟運等で活用することを検討します。
- 橋詰広場の川への近接性を活かし、人々が川の近くで憩い、活動できる場所とすることを検討します。
- 川沿いに顔を向けた建築物がつながりをもって建ち並ぶよう、川と水辺を意識した建築物の建て替えや開発等を推進していきます。
- 人々が川沿いで憩えるような空間形成に向け、川沿いの公共空間（道路や広場）と民間建築物の連携を推進していきます。
- 川を活かした取組み・交流を行い、川に関する情報の発信等ができる拠点の設置について検討します。



▲現在の船着場（新三崎橋）



▲川端緑道でのキッチンカー出店



▲拠点場のイメージ（大阪府・β本町）

方針
③

水辺空間の連続性～水辺の拠点を結ぶネットワークの構築～

(1) 歩きたくなる川沿いを作る

- 子どもから高齢の方まで幅広い世代が、川沿いを居心地が良く歩きたくなる場所とするため、民間敷地の歩道上空地と公共空間をつなげる取組みや滞留空間の創出について推進していきます。
- 川と地域資源のつながりを強化するとともに、歩きたくなる川沿いとするため、景観を楽しめるビューポイントの創出を推進します。
- 東京都建設局の神田川流域河川整備計画における、日本橋川の歴史的資源と調和を図った防潮堤の整備と連携し、歩行者空間の創出について検討します。



▲管理用通路を用いた歩行者空間
(大阪府・道頓堀川)

(2) 水面のネットワークを作る

- 防災船着場を使用した舟運の定期的な運航により、周辺区も含めた観光スポットと連携した観光船や、新たな交通ネットワークの構築について検討します。
- 川と人の距離を近づけるため、橋りょう下の空間を、歩行者空間として活用することや、橋詰広場とつなげることを検討します。
- 川を軸とした周辺の道路、建築物とのつながりの形成や、川沿いの史跡・拠点等のつながりの形成を推進します。



▲橋の下の空間をつなげる
(イメージ：福岡県・柴川)

方針
④

川を使う～ハレの場としての河川空間の活用～

(1) 川沿いのハレの場としての活用

- 川に関わる多様な主体が川を通じて交流できるように、川での活動やイベント等を推進します。

(2) 川の活用に向けた環境の構築

- 川沿いのオープンスペース等を、地域の季節行事やイベント等で活用しやすい環境づくりについて検討します。
- 防災船着場を常時閉鎖するのではなく、地域等で活用できる場所としていくことを検討します。
- 川と人の距離を近づけるため、橋りょう下の空間を、歩行者空間として活用することや、橋詰広場とつなげることを検討します。
- 川を活用した活動の拠点の創出を推進します。



3 エリア別方針

日本橋川エリアー川沿いに人々が憩える、回遊性のある環境づくりー

1. 防災船着場を拠点とした水上交通の回遊性向上

現在の防災船着場を活用し、区内・区外を含めた観光スポットと連携した水上交通の活性化を図り、都心部からの新たな観光アクセスルートの拡充を図ります。

2. 川沿いのオープンスペースの拡充と歩行者空間の連続化

川沿いに整備されている歩道上空地と橋詰広場や橋りょうの下の空間につながりをもたせ、誰もが川沿いを歩きたくなる環境の整備を進めていきます。

また、川沿いの大規模開発時には、賑わいができる空地进行を推進していきます。

3. 首都高速の高架下空間の改善

首都高速の高架下空間となっている日本橋川の暗いイメージを払拭するため、愛着の沸く温かな雰囲気生まれるような川沿い空間創出を進めていきます。

4. エリアマネジメント団体等と連携した川沿いの活用の推進

川沿いに存在するエリアマネジメント団体・まちづくり協議会と連携し、川沿いのオープンスペースを用いたイベントや、新たな試みの実施などを先導していきます。

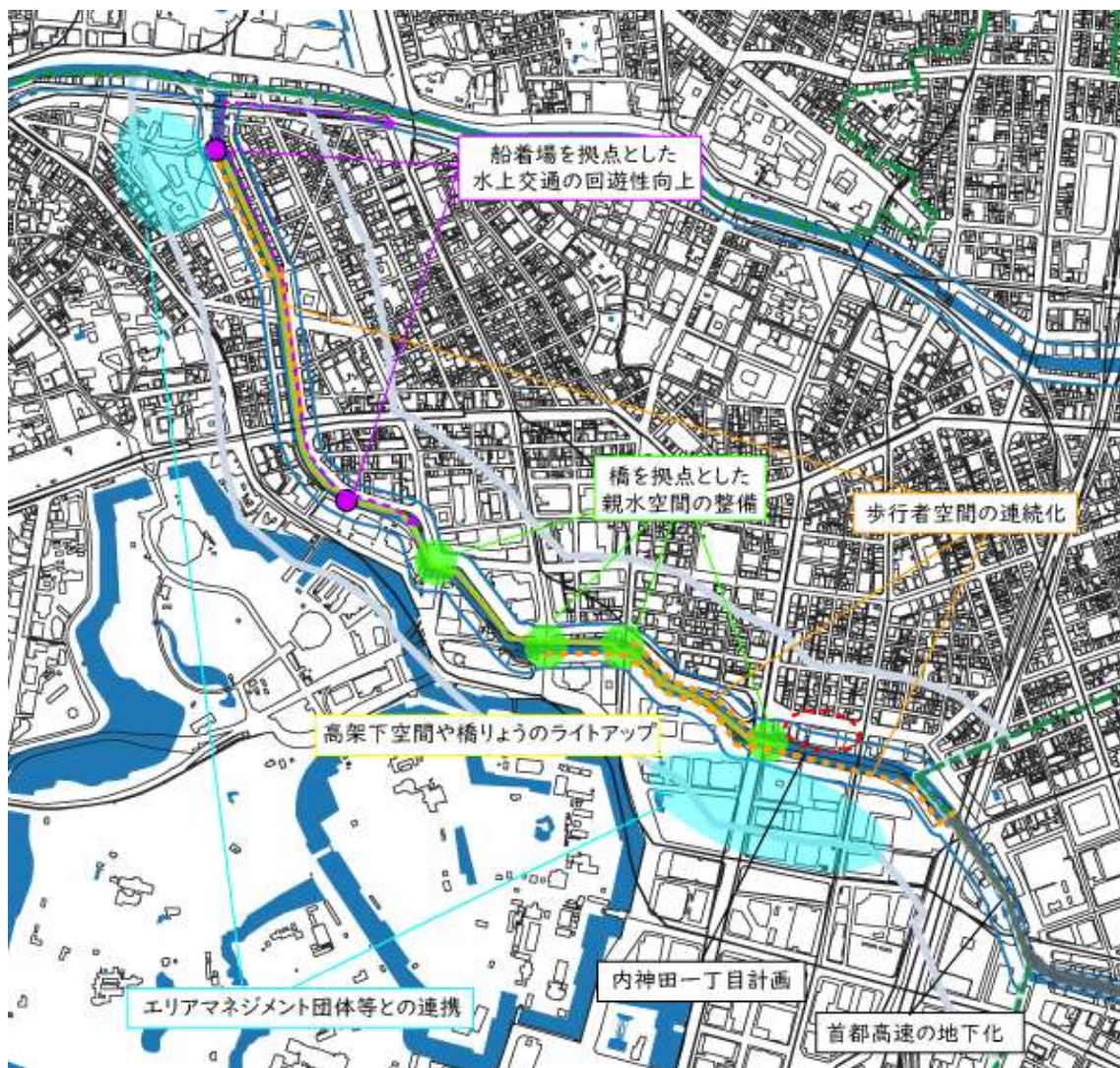


図 日本橋川エリアでの取組みイメージ

神田川エリアー自然と拠点を結ぶ日常と非日常使いができる河川空間ー

1. 御茶ノ水付近の堤防・川岸の緑との連続性の創出

御茶ノ水付近の緑が豊かな川沿いの風景を保全していくために、前後の区間も含め堤防の緑化を行い、緑豊かな風景の連続性創出を推進します。

2. 大規模店舗等地域の拠点から川沿いへの歩行者動線の誘導

万世橋の mAach ecute のように川沿いを活用した飲食店舗等の連続性がさらにつながるまちづくりの推進を図ります。川沿いの建築物の建て替え時に1階店舗を誘導させていきます。

秋葉原周辺の電気街から川沿いへ向かう新たな歩行者動線を確立させ、川に開けたまちづくりの推進をしています。

3. 船着場を拠点とした川の拠点づくり

和泉橋防災船着場は、水面に近づくことのできる階段状の広場と出張所が近接している環境を活かし、人々が川を楽しめる場、情報発信の場として推進していきます。

4. 川を眺めることのできるビューポイントの周知と拡充

神田川エリアは、土地の高低差があるため、川を上から見渡すことのできるビューポイントが多く存在します。

高低差のある地形を活かし、ビューポイントから一段下がれる広場やテラスを設け、川をより身近に感じれ、風景を楽しめる憩いの場の創出を推進します。



図 神田川エリアでの取組みイメージ

外濠エリアー豊かな水面を活かした人々が水と自然を感じる場所ー

1. 外濠を楽しむことができる環境整備

外濠沿いにある児童遊園や外濠公園は外濠を見下ろすことができる位置にあり、園内に外濠の景観を楽しめる空間の創出を図り、公園を歩いて楽しむ・休憩する空間の充実化を図ります。

2. 周辺大学と連携した水辺の取組みを推進

エリア内に存在する大学と連携し、水辺を活かした学生の取組みや、外濠の水辺を親しむような地域との協働・交流の発信を行う活動を推進していきます。

3. 水上アクティビティエリアとしての活用

閉鎖水域である外濠の特性を活かし、外濠の水質の浄化に合わせ、水辺を楽しむ拠点作りと水上アクティビティの推進を図ります。

4. 周辺区と連携した駅などの拠点から外濠への誘導

周辺区と連携し、外濠に向かうルートのご案内や道路の意匠を統一していくことにより、人々が駅などの拠点から外濠に向かいやすいような環境を推進していくことが望まれます。



図 外濠エリアでの取組みイメージ